

2017 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 佳作

私らしく自然に感謝を

(原文)

猫村 彩花 (12 歳)

広島県

広島なぎさ中学校

近年よく山から熊が降りてくる。どうしてなのだろうと考えると、すぐに答えは見つかった。それは木の伐採からの食物の減少だ。

つまり熊は生きる為に山から勇気だけを頼りに恐怖感の中、一歩ずつ未知の世界に足を踏み入れ食物を探すのだ。では逆にどうして人間は木を伐採するのだろうか。私たちが熊と同じで生きる為だった。

山から降りてきた熊に襲われたと主張し、それに同情する人がいる。確かに私も熊に襲われると考ただけで怖くなる。でもその大凡の原因は人間にあるのではないかとふと思う。自然はどの生物にも共通して必要とされるのになぜこんなにも傷つけ合わなければならないのか。

私が通っている中学校のある先生は「目の前が見えるようになったら、周りを見よう。」といつもおっしゃっています。なので私達人間も先生のおっしゃる通り、人間という小さな世界に限らず地球という沢山の生物が暮らす大きな星を長い目で見れば良いと思う。

私は考える。「自然を人間だけの利益に使うのは間違っている。」と。

私は、沢山の文章を読む中で心に刺さる文章に出会った。その中の文には、「人間は自分達で道具を作り始めた時代から自然との調和を忘れた。」と書かれてあった。

確かにそうだと思う。人は、火を使い木を切り倒し、化学兵器や武器をつくり全世界を巻き込む戦争をもつくり出した。

「人間が誤った事をしている時でも自然は正しかった」

そう考えると私たち人間はいつも自然から受け身だと思う。人間がいくら木などを乱用しても、自然は天災から私達を守ってくれる。

私が通っていた小学校では小学 1 年生になると 6 年生の、お姉さんやお兄さんとペアになり 1 年間を通して一緒に過ごす。

入学した月にある遠足では手をつなぎながら目的地に向かうが、私がきん張していたため、ぎこちない空気だった。目的地に着き自然とふれ合っているといつの間にか仲良くなり、私には実の姉がいるのにペアの 6 年生を当時「おねえちゃん」と言っていた。

私が 6 年生の時も同じだった。1 年生という小さい子を目の前にして遠足に行ったとき、自然と一

体化して一緒に遊んだ後またいつの間にか1年生のペアの子と仲良くなっていたのだ。

この2つの思い出は私の中で今も輝いている。このように私は自然から沢山の思い出と友達をもらった。今度は私が自然に対して恩を返す番なのだ。

私が目指す将来の夢は、国際連合の職員になって難民や発展途上国の子供達に戦争の無い美しい世界で必要とされる勉強を教えてあげたいというものだ。でも本当の平和とは戦争がないだけではないと最近思い始めた。

私が考えた本当の平和とは、戦争がない世界だけではなく全世界に共通して今も呼吸をする生物が豊かで充実した日々を過ごす事である。自然を心から大切にする事は戦争をやめる事と同じくらい素晴らしい事だと思う。

自然を永遠にあるべきものだと考えるのなら自然破かいをやめ、動物達も安心して暮らせる様にすべきだ。なぜなら自然破かいを進めても未来の自分達を傷つけているだけだと思うからだ。今まで人間は都合良く自然を乱用してきた。

「無くなると困る木などをむやみに切り倒すのは、もうやめたい。」そして一人ひとりが自然についてどう考えるのか意見を出し合い切られた分だけ木を植え、未来につなげるという事をしていきたい。また、人間の文明が発展する度自然も豊かになってほしいと私は考え人間や動物、植物が共存できる事を願い世界規模になって手を取り合いたい。そうする事で初めて人間と自然が平和に生きられるのだ。これからの私達に必要とされる本当の事は自然破壊を止める勇気と自然への感謝だ。